

【巻頭言】

はじめに

柏倉康夫（放送大学名誉教授）

「情報化社会・メディア研究」は2004年12月に創刊して以来、今回第10巻を刊行することができた。放送大学大学院で情報化社会研究のゼミに所属して研鑽にはげんだ修了生を中心に、研究の成果を発表する場としてスタートした研究誌で、これまでの9巻で都合102本の論文と研究ノートに掲載した。論文はどれもが編集委員による査読を通った有意義な研究であり、ここから博士論文も誕生した。

創刊号に掲載された相川由紀夫「大宅壮一文庫における知識の組織化」や中西裕「幕末明治の読書史——多摩の豪農層を中心に」に見られるように、研究テーマは情報化社会におけるメディアの役割を中心にすえているが、ここでいうメディアは口コミにはじまり、書物、新聞といった紙媒体、ラジオ、テレビの電波媒体、あるいは写真、絵画、映画などの光学的媒体、そして学校、図書館、博物館、自治体、集会所など、場としての媒体までを含むものである。さらにこうした情報ツールを通して伝えられる情報や思想をテーマにした研究も多く、これらの成果はCiNii（国立情報学研究所運営の学術文献データベース）でフル・テキストを読むことができる。

「情報化社会・メディア研究」が一つの転機を迎えたのが前回第9巻であった。この巻では、従来の個別研究や研究ノートのほかに、会員の共同研究として、「原発事故を米軍“準機関紙”はどう伝えたか Stars and Stripes 紙の報道内容分析から」に掲載した。

これは2011年3月11日に起きた福島第一原子力発電所の事故とその後の対応について、アメリカ軍の準機関紙 Stars and Stripes がどう伝えたか、新聞記事を分析したものである。そこで明らかになったのは、独自の報道の仕方であり、当時日本のメディアに頼った私たちが知りえなかった事実が伝えられていたことだった。

事故から4日目の3月14日の朝、東京・横田基地の在日アメリカ軍司令部から外務省に電話があり、「震災支援をするために放射能関連の情報が必要なので、何か情報を持っているなら教えてほしい」との要請があった。外務省の事務官は関係官庁と連絡を取るうちに、文部科学省の防災環境対策室に SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測システム）の情報があることを知り、それを在日米軍司令部に伝えたという。アメリカ国務省と在日米軍はこの情報と独自の調査結果から、緊急事態にそなえて在日米軍の家族の帰国を実施した。だがこの情報は肝腎の福島第一原発周辺の住民の避難には、的確に役立てられなかったのである。

私たちはこの共同研究をもとに、昨年2013年4月4日、放送大学神奈川学習センターでシンポジウムを開催し、この様子は放送大学の番組「大学の窓」でも紹介された。そして

シンポジウムを聴いてくださった天川晃先生（日本政治外交、地方自治政策）の橋渡しで、天川ゼミとの交流が生まれ、第10巻には天川ゼミの会員から研究を投稿してもらうことができた。それが栗原孝之「蠟山政道 戦時下(1937～1942)の『地域主義』～総合雑誌からその本質を探る～」である。放送大学でともに学び、修了後も研究を続けてきた人たちと横の連携ができたことを喜びたい。

第10巻では、もう一つ「地方」をテーマにした研究が幾つか寄稿されている。

情報は本来、少しでも広い範囲に伝わり、できるだけ大勢の人に共有されて価値を生むという性質をもっている。具体例をあげれば、テレビやラジオではローカル放送の役割をどう考えるか、遠くまで届き、広い範囲をカバーできる電波にのせるべきテーマの地域性をいかに考えるかは絶えず議論されるテーマであり、さらに図書館の蔵書構築の地域性の問題も同様である。

天雲成津子「文学館にみる『地方』」は、筆者が長年勤務してきた秋田の図書館の現状を踏まえつつ、地方に保存される文学資料をいかに保存し、それを継承していくかを論じている。

また齋藤多美江「2つの事例に見る戦後開拓の実態」は、同氏が上海から引き揚げたあと、両親とともに移住した瀬戸内海の小豆島での体験をもとに、終戦で生じた膨大な引揚者を定住させる国家的事業である開拓の実態を詳細に記述している。小豆島の開拓事業を記録した文献はこれがはじめてである。

丸山敦「伝統工芸職人の文化的背景～近代におけるメディア環境～」は、明治期の石川県金沢で活躍した加賀象嵌の名人、米沢弘安が残した日記を通して、彼ら職人たちがいかなる文化的環境のもとで、伝統を継承し、発展させたかをさぐった好論文である。

2014年元旦、朝日新聞の「オピニオン」欄に沖縄・那覇で古本屋を開いた宇田智子さんの記事が載っていた。宇田さんは大学卒業後大手書店に勤務していたが、ゆったりした時間を過ごしたいとの思いから那覇に移住し、閉店するという古本屋を引き継いで畳三畳ほどの店を開いた。彼女はこう語っている。

沖縄で学んだのが根っこのある生き方です。「沖縄県産本」という言葉をご存知ですか。沖縄には他県では考えられないほどたくさん地元出版社があって、歴史や言葉から音楽、料理まであらゆるジャンルの本を出している。それは地元根付いて生きている人が大勢いるからだと思うんです。（中略）県産本という言葉には、地元が地元の文化を受け継ぐんだというプライドを感じます。

文化は個性の集積であり、その点では地方こそが文化の源泉であるに違いない。「情報化社会・メディア研究」はこうした視点を守りつつ、第20巻の刊行にむけて着実な歩みを続けたい。